

## 復興期畫談〔二〕

黒田清輝演述

### 總論

私が今度此題目の下に話をするに付ては、先づ何ういふ事をお話するかを最初に一寸申して置きます。私の話は主として此復興期の畫家に付て其略傳や、又其人達の製作品に付て、中でも私が現に見たものに付ての感覺の如きものなどをお話しやうと思ふのであるが、先づ復興期の成立を一通り述べて置きます。

大體復興期の事を眞正に能く分らうといふには、何うしても其以前の所謂中世を知らねばならぬ、其中世の事を知らうといふのには又其前を究めねばならぬといふ様な譯で、前の時代の事から能く調べる必要がある。又美術のことを知るには、社會の組織社會の思想といふ様なものが能く分つて居なければならぬのであるが、前の事や何かを一々委しくいふとなれば中々一朝一夕に盡さるゝものでないから、茲には餘り久しい前のことなどは措いて、假りに復興といふとになりかゝつて來たといふ頃からの人物に付て述ぶるとする。

或る歴史家が云つたことがある、歴史は宛も水の流れの如くで、或時は全く砂の中に隠れて見えなくなり、或時は急流となつて奔騰することもあり、或は深淵となり、或は淺瀬ともなるので、其水が假に見えぬからと言つて流れの盡きた譯でもなく、盡きたと思はれた流れが又更に大きくなる場合もある。歴史は宛も之に同じく、前々からの引續ぎで相原因結果をする、因縁のことが分らなければ歴史は分り悪いものである、今此復興期といふことも

何年何月何日に始まつて、何年何月何日に終つたと、はつきり極つた譯のものではない。前後は切り捨て、中の所を取つて之れに名づけたまでのものだと思ふ。

繪畫彫刻建築の様なもの、復興期に一の氣運に向つて大變發達した様だが、それは勿論發達したには相違ないが、何も急に飛び出したやうに興つたものでもなく、其興るといふには水の流れと同じく何十年といふ資本を要して、其隠れて居る時代は水が砂に隠れた如く、一寸其處には見えぬが、見えぬといふて決して絶えて仕舞つたのではない、固より復興期以前に砂の中に已に復興の水は流れて居たに相違ない。

それで復興期の繪畫が如何なる順序を以て進化したかといふことを述べて置きませう。

さて復興期の繪畫が盛んになつて來た順序といふのは先づ最初は一寸趣が變つて來たのである。繪畫に一種の勢が加つて來て、此の勢といふ奴が芽で、之れが遂に葉ともなり茂みともなつて行く。彫刻の如きは確に繪畫よりも前に芽が出た。繪畫に就ての復興の元祖とも言ふべきものは、シマビユーといふ人であつて、それからチオットといふ人になり、それからいろいろ次第々々に出て來るのであるが、先づ此人達が率先者である。

然るに此の率先者の技倆は同時代の彫刻師連の技倆に比ぶれば遙に劣つて居る。繪畫よりも彫刻が早く復興の運に向つたことは事實である。繪畫に類似したもので繪畫より前に發達したものは「モザイク」であつた。それで後には人も知つて居る如く、彫刻や「モザイク」よりは繪畫の方が大層盛んになつたが、復興期に入る前、第十一世紀より第十三世紀位の間には、繪畫は誠に覺束ない譯のもので、此時は丁度流れが砂の下に潜んだ時代である。其頃の繪畫は其後の復興期のものに比ぶれば、殆んど懸軸と錦繪位との差がある。

復興期に向つてからは、人物の形が次第に正しくなつて行くやら、又顔付等に活氣も加はり、姿勢の變化も來したのみならず、畫面の組立が餘程變つて來た。抑復興以前に於ては畫といへば大抵耶蘇の磔刑の圖で、其同じ圖を終始繰回して描いて居つた、それが最初の進歩を示した時には、先づ磔刑の圖中に新らしい人物が次第に加つて來ることゝなつて來た。先づ十字架の下に耶蘇の母即ち聖母と弟子のサンジャンとが畫かれ空には神や「アンジュ」などが現はれ、猶降つては耶蘇の門弟なる男女其他磔刑を施行する兵卒の如きが次第に畫面を賑はして來た。眞の復興期の立派な繪畫となるに至る迄には、種々變遷の時代が相繋つて居る、古い畫の耶蘇は至つて瘠せて居て、肩が恐ろしく尖り腹が搾め切られた様で、體の色はいやに青白く、實に氣味の悪い姿のものである。之を解剖の方から考へても、いゝ加減なもので、只信仰の道具として拜ませる爲に描いたものであつたので、つまり人物の形も亦其描き方も極拙なものであつた。

そこで第十三世紀の初の頃から、いはゞ改良ともいふべきものが始まつて、人物の形や色の上からいつても少しづつゝ良くなつて來た。それで西洋畫の特色ともいふべき光線を利用して畫面全體の調子を合はせるといふことも少しづつゝやる様な具合、隨つて人間の形も姿も餘程自然に近づつた。尤も此の善くなつたことの見易いのは耶蘇の體で耶蘇の體の前には酷くしやちこばつた憐れなものであつたが其れが大分見よくなつた。啻に見よい許ではない、此時代には中々好いものも少しは出來た。彼の復興の元祖なるシマビユーといふ人は千二百四十年に生れて居るが、兎も角此人からは繪畫が目立つて次第々々に立派になる。

シマビユーは生れは貴族で、小學校に通つて居る頃から、書籍などに畫許り描き散らして居たといふ位の人です。

此人の繪畫は、後の者の作に比すれば、まだ餘程古風なものではあるが、何んと云つても哀れ、至極な姿のものに、活氣を添え、畫といへば十字架の圖や「マドナ」の像の様なものに極つて居たものが、此人の頃から聖書の中の種々な節をとつて畫にするといふことになり、又聖書に限らず、宗教に關係ある口碑傳説も畫にするといふことに進んで來た。

此位になつて來たのは、先づシマビユーが基をなしたものであつたが、其の有名なシマビユーも、程なくヂオットには及ばなくなつた。

ヂオットは千二百七十六年の生れで千三百三十七年に死んだが、此人は即ちシマビユーの弟子で、素は牧羊者か何かであつて、極卑賤のものから、畫家になつたといふことである。

後に追々オルカニヤ、マソリノ、マサツチオ、フラ・バルトロメオ或はアンドレヤ・デル・サルトなどいふ人々が起つたが、畢竟是等の人々はヂオットと同じく皆自然に近寄ることを一生懸命にやつたらしい。そこで人物を描くのも、其人物の一人々々に就て、顔付といふ様なものにも、大變骨を折つた、大きい壁などに描いてある多數の人物など、其面部は全く其當時の人の肖像である。

斯うなつて來ると、今迄只拜む丈の畫であつたものが、非常に變化して、拜ませる爲めといふよりも寧ろ人の考や又感覺を描き現はすといふ様のことになり、力める様になつた。是迄は總て耶蘇の經文中の事を繪にするといふ丈のことであつたのが、道徳や情慾の如き無形のものをも形に現はして描き加へることゝなつて來た。畢竟人の理想と歴史とを並べて描き始めた。後に至つてミケランジュなどが此の趣向を採つて充分な所までやつた。又此の外に

驚くべきことは、チオットが遂に遠近法までも應用して描いたことである。

其後此チオットの門人はチオットのやつたことを繼續して進めて行き、直接にチオットの畫風を受け繼いだ所のデオ・ガヂといふ人から最後の承繼者とも云ふべきスピネロ・アレチノといふ人（此人は千四百八年頃迄生きて居た）までは多少の進歩はあつたにせよ、つまりチオットの主義法則を行つた迄のことだといつても宜い。此のチオットが主義法則とする所のものは遂に復興期の伊太利美術家全體の精神となつた。それは如何に彩色に傾いて居る畫家も、決して形を疎かにしない。又人物に就いて云へば、姿勢を確かに描くからといつて、面相などは何うでも宜いといふ様なことはしない。それから畫面全體から云へば、大體の調子を纏める爲めには、細部分は宜い加減にして何うでも宜いといふ様なことは決してないのである。

チオットの承繼者のデオ・ガヂの畫は人物の骨格或は「プロポルシヨン」の上から云つても亦た彩色の點から云つても、何うしても其師のチオットには及ばなかつたといふ評判である。然しながら此の人の畫は矢張り一種の云はゞ幾分か裝飾的に立派だといふべきものである。猶此他に歴史と想像とを組み合わせ、一の畫を拵へるといふ様なことをもやつた。

其他にまだトマソ・ヂ・ステファノといふ人があつた。此人はチオッチノといふ綽名を付けられたが、此人は元來大層儼いだ様な人で、始終内に引込んで許り居た、然し技術に就ては餘程熱心なものであつたといふことである。それでヴァザリといふ人の畫家の傳記中にチオッチノが描いた耶蘇の頭を抱へて聖母が泣いて居る圖を評して、此の非常に能く現はした所の苦しみと涙が顔付の神聖を汚さないと書いてある。是に因つてもチオッチノが自然

を寫すことに巧みであつといふことの證據は充分だ、全體伊太利の畫は自然に近寄るといふことを基本にして發達したものではあるけれども寫實に骨を折るが爲に其れにかたより卑しく爲つて不快な感覺を起させるといふことは決してない。是は伊太利人の特色で、好んで常に寫實は力めつゝも、何ういふものだかいやらしく汚ならしくなることの無いのは不思議である。

千三百年頃にはチオット派の畫が少しくすたれて來て、即ち流が砂の下に潜んだ姿であつたが、アンドレヤ・オルカニヤといふ者が出て、復た此流が非常に盛んになつて來た。オルカニヤはチオットなどよりは無論遠近法に委はしかつたから、其門人等となつては、人物を描くにも遠近法を用ひ、或は長く短く或は廣く狭く描く、實に巧妙を極めることになつた。

夫から光線に注意して、明るい所と暗い所を照應させて畫面の體裁を整へる事は既にチオットも力めて居つたらしいが、オルカニヤの如きは、更に一步を進めて明より暗に押し遷つる其變化の細かな調子をも巧みに描き現はすに至つた。

即ちチオット流の終り迄を復興の第一期とすれば、此オルカニヤは確に第二期を拵へたと云つて宜い。

極簡単に述べれば、復興期の始まりはざつと斯ういふ様な順序に思想が變化して來て、流れに譬へて云へばオルカニヤと共に餘程地面に水が現はれて來たのである。愈々復興の眞の立派な流をなさうとする所の、細い川筋は、大分一緒に落合つて是からは一の大きな流を成すと云ふ時に爲つた。

これからのお話は最初に云つて置た通り、人を主にして、其人の傳記や畫風などをつまんで述べて行きたいと思

ふ。いはゞ大きな流れをなして居る所の種々な水を別々にお話して行くつもりであります。

此復興と云ふことが、初めて伊太利の畫に現はれて來てから、漸次勢を進め、遂に十六世紀の盛んな時代が起つた。其順序の如きものに就て、二纏めにしてざつとお話をしましたが、随分混雜した述べ方で、明かでなかつた様でしたから、終りに臨んで、一通り系統の如きものを列べてお話をすることにして置きます。

既に前にお話をした如く、先づシマビユーと云ふ人から始つて、其次にヂオットと云ふ人か出、是で一寸本當に畫の復興といふことに勢が向つて來たのであつてヂオットより十五世紀の初めに至る迄は、先づヂオットの流派の繼續したのであつた。

シマビユーは千二百四十年から千三百二年、ヂオットは千二百七十六年から千三百三十七年、十三世紀から十四世紀に跨つて居る。十四世紀の方ではタデオ・ガヂーが千三百三年から千三百六十六年、オルカニヤが千三百八年から千三百六十八年、トマソ・ヂ・ステファノ一名ヂオツチノが千三百二十四年から千三百六十八年スピネロ・スピネリ一名スピネロ・アレチノが千三百三十三年から千四百十年で、此人達は皆なヂオットの流派を殆んど其儘やつたといふ位の人である。

スピネロ・アレチノがヂオット流の最後の人であると云つて宜い、此人の死んだ年號は書物に因て多少皆異つて居る。或る書には千四百八年頃迄居つたとあり、又他のものによると、千四百十年に死んだと出て居る。千四百十五年と記したのもあります。孰れにしても十四世紀から十五世紀に跨つた人である。

十五世紀になりますと、非常に立派な畫家が澤山起つて來ました。其の中のマソリノ、マサチオは兄弟の畫家であ

つて、孰れも十五世紀の半ば以前の畫家である。マソリノが兄で、マサチオが弟である。兄のマソリノの履歴は判然しないが、生死年號は千三百八十三年から千四百四十年である。弟のマサチオの方は千四百二年に生れましたが、死んだ年丈は分りません。短命な人といふことであるが、畫は上手で作品を多く残した。

尙此外に十五世紀の人の中で、フラ・バルトロメオといふ名を云ひましたが、是は千四百七十五年から千五百十七年迄、即ち此人は十六世紀に跨る人である。

夫からアンドレア・デル・サルトとミケランジュの二人です、孰れも十六世紀の人である。アンドレアは千四百八十七年から千五百三十一年、ミケランジュは千四百七十五年から千五百六十四年、先づ大體斯ういふ順序になつて居ります。

十三世紀は畢竟開けない時分である。十四世紀はチオット派の一人舞臺といふ時代である。十五世紀はいろく、畫のことに就て新奇な事を描く大家が澤山起つたけれども未だ半分は古風な所を存して居る。十六世紀は開けきつた所で、繪畫全盛の時である。

以來私の談話中に順序なく現はれて來る諸大家の畫風に就て其の大體(特色は別として)の所を知るには、先づ何世紀の人であつたかといふことを考へて其の時代にあてはめて、たとへば此の人は十四世紀だから矢張チオット風が有つたに違ひないといふやうにやつて行けば幾分か分り易いだらうと思はれる。